



喜多埜

天神さまと千利休

今月二十八日は、桃山時代から現代まで続く「わび茶」の大成者として名高い、千利休の命日にあたります。この日、茶道の家元の一つである、裏千家では利休居士を偲んで利休忌が営まれ、全国の茶道関係者が参列されます。

さて、この千利休と天神さまとは少なからずご縁があり、時の閑白であつた豊臣秀吉の命により、天正十五年に全国の天神さまの総本社である京都の北野天満宮において、秀吉の邸宅である「聚楽第」の竣工を記念して「北野大茶湯」が催され、千利休は秀吉と共に、天満宮の社殿にて茶席を設けて、参拝者に茶の湯を振る舞つたといわれています。当時、神社の社殿において茶席を設けるという事は前代未聞であり、天神さまこそが茶の湯を献じられた天神さま第一号であつたといえるかもしれません。

その千利休は、七十歳の時、秀吉の勘気に触れ、切腹を申し付けられ、その自刃の前に娘のお亀あてに左記のような歌を書き送っており、『利休めはとかく果報のもので

かし菅丞相になるとおもへば』

と、自分が無実の罪により自刃するさまを、同じく無実の罪で太宰府にて薨逝なされた菅原道眞公（菅丞相）に照らし合わせて切腹に臨んでいます。この事から利休の心胆には菅丞相、即ち天神さまの生き様である「誠の心」こそ根幹にあつたが故に、「わび茶」という我が国独自の美意識を大成出来たともいわれています。

利休の死後四百年以上経つた今も、北野天満宮をはじめ各地の天神社では利休の故事を偲び、献茶祭が執り行われています。

三月の二十四節季

日本には春夏秋冬の四季がありますが、この四季を太陽の運行に基き、現在の暦とも合わせて更に細分化したものが二十四節季で、一ヶ月を二季に分けています。

この三月には啓蟄（けいちつ）と、春分（しゅんぶん）という名の二季があります。

啓蟄とは三月六日頃から春分までの時期で、この頃から大地が暖まり、冬眠をしていた虫が目覚ます頃とされています。また植物ではフキノトウや桃の花が咲き、青虫が蝶々になるとされます。ちなみに、日本以外の漢字圏では啓蟄の啓の文字が漢王朝第六代皇帝、景帝（三国志の劉備の祖先とされる）の諱の劉啓と同じ事から、恐れ多いとして避諱し、啓と同じ意味を持つ驚の字をあて、「驚蟄」と書くようになり今もそのように書きます。

春分は三月二十一日頃から四月の清明までの時期で、秋の秋分と同じく、日夜の時間がほぼ同じになる日であり、「春分の日」という祝日に指定される日でもあります。この春分から一気に春めいて、桜の花や菜の花といった春の花が開き、春雷も鳴りだす頃とされ、まさに冬と春の分かれ目といえます。

この三月は春の訪れを花々が告げる、生命の動きある季節といえそうです。

神社携帯サイトのQRコード

ドコモ、ソフトバンク、
au、モバイルPC 対応



編著 網敷天神社 禰宜（神主）

白江 秀知

